



## 「2010年のカシオペア医療を どう守るか」

院長 佐藤 元昭

昨年(2009年)勤務医不足に関連した九戸地域診療センター(診療所)の無床化問題や新型インフルエンザで当院にとっても大変な年でした。しかし、なんとか切り抜けてきました。マスコミにも医師不足や勤務医の過重労働、診療応援の多さなどで当院がたびたび取り上げられました。やっと患者や住民の一部から二戸病院の医師、看護師などが大変な状況でこの地域の医療を支えているのだということが分かった、という声が出てきました。でも、住民は医師不足で地域医療が壊れていることを本当に分かっているのでしょうか? 二戸病院も医師不足でつぶれるかもしれないという危機感がありますか? それくらい大変な状況なのです。

さて、北海道の夕張市立病院がつぶれました。現在、診療所として再建に苦労していますが、その村上智彦先生の話(毎日新聞平成21年12月22日)を引用してみます。

・・・夕張にかぎらないけど、最近は自分の言い分ばかりを主張する患者が増え、医療への要求が「ニーズ」(必要)じゃなくて、過剰を求める「ウオンツ」(欲望)になってきた。国の医療費がパンク寸前なのも、最大の要因はこれだね。みんな勘違いしているけど、医療とはいつ何時でも患者の希望をかなえることじゃない。徹夜したパイロットにフライトは任せられないでしょ。医者だって本来、徹夜明けの勤務をしてはいけないんだ。警察や消防と同じで住民の安全保障。命を救うための、いざという時の備えなんだよ。地域医療に従事している医者はもともと意識の高い人が多い。でも、住民から「税

金でやってるんだから、いつでも診るのが当たり前」と言われたら心が折れてしまう。志ある医師は去り、その地域の医療崩壊につながっていく。実際、そういう例を僕は知っている。だから不要不急の外来は避け、夜間外来にかかった時は「遅い時間にありがとう」と声をかけてくれれば僕らは救われる。・・・

いかがでしょう。実は夕張市立病院がつぶれた最大の原因は住民だったのです。医師を大事にしない、文句や要求ばかり言って、病院に感謝の念を持たず好き勝手に利用するということが病院崩壊になったのです。医師が辞めて、いなくなってしまうのは、そのような自分勝手に行政や病院に甘えきった住民に対する無言の抵抗なのです。

さあ、この大変なカシオペアの医療です。結論からいうと、住民の意識改革です。自分たちの医療は自分たちで守る、賢い住民になりましょう。まず、近所のかかりつけ医(診療所、開業医)を持つこと(どんな科でもかまいません)なにかあったらまず近くのかかりつけ医に相談する。そこで必要ならかかりつけ医からの診療情報提供書(紹介状)をもって病院を受診するのが賢い患者です。次に病院は入院が本来の役目だということをしっかり覚えましょう。外来は診療所、入院は病院というのが基本です。上手に医療機関を利用することが地域医療を守ることになるのです。

さらに住民の方々も一緒に考え行動する事が必要になってきています。「地域医療はみんなで共に考える」です。